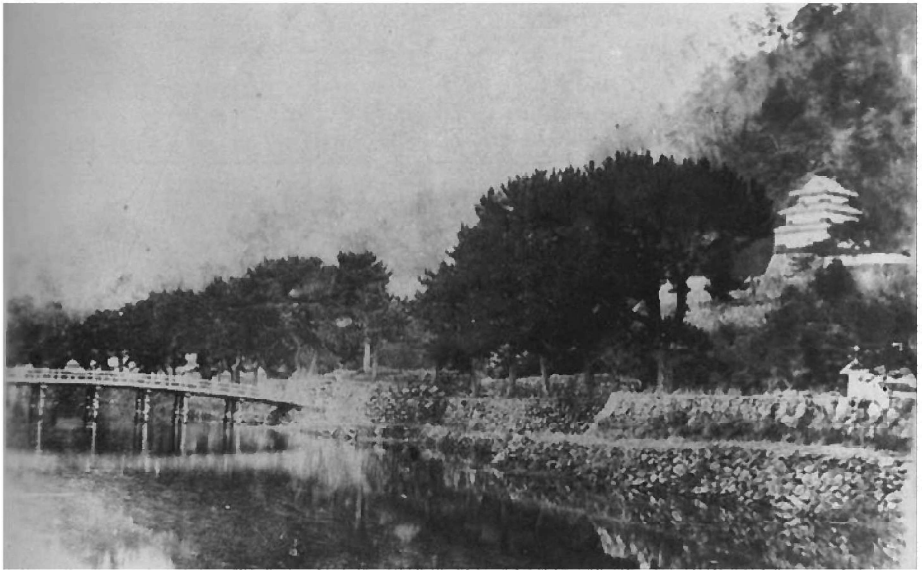


擬宝珠橋の歴史

擬宝珠橋は、鳥取藩 32 万石の居城の大手橋として、姫路から移った池田光政（後の岡山池田家初代、鳥取城に 15 年間在城）と共に、姫路城の大天守を築いた播磨地方の職人らの手によって元和 7 年（1621）に創建されたと考えられています。その後、寛永 9 年（1632）には鳥取池田家に継承され、幾度かの架け替えを経て明治 30 年（1897）まで存続しました。

この橋は、鳥取城の正面玄関の入口で、登城に利用されたほか、藩領各地への距離の起点にもなっていました。また、橋の上では、端午の節句には若殿が陣取り、堀端で繰り広げられる「幟遶り（のぼりねり）」（馬に乗った武士を町人が竹やりなどで威嚇する祭り）を見物したり、夏の夜には納涼の宴が催されたりするなど、儀礼の場としても活用されました。



在りし日の擬宝珠橋（左）と二ノ丸三階櫓（明治 12 年（1879）、現古川経家銅像前周辺から撮影）